髪型・服装の評価が共学・別学女子によって異なるか？

○大井修三

(岐阜女子大学文化創造学部)

キーワード：外見評価, 共学・別学女子大学生, 場面適合性

Differences of Impression of Female Appearance between by Mixed and by Women's College Female Students

Shuzo Ohi

(Gifu Women's University)

Key Words: rating appearance, mixed/women's college, situational suitability

目 的

社会的な場面には、我々はその場に相応しい装いで参加する¹⁾。山に行くとき、アルバイトに行くとき、就職活動の面接に出かける時、飲み会に参加するとき、ライブ演奏に潜入するとき。これらの場面で、どのような服装でも構わないのかというそうではない。きまりがあるわけではないが、暗黙の裡にそれぞれに相応しい装いがあると考えている。その暗黙の基準はどのようにして決まっているのか。日ごろの学生同士の会話の中で場面に相応しい装いが語られ、暗黙裡に決められているのではないか。そうであれば、様々な場面に参加する女子大学生の装いも、そのような経過を通して決められており、別学の女子大学生と共学の女子大学では、基準を考える語り合いの中に異性がいるかないかで違ってくることも考えられる。そこで本研究では、いくつかの外見サンプルと場面の適合性の評価に、別学・共学間で違いがあるかを検討することによって、この問題を解明したいと考えた。

方 法

調査協力者：女子大学の学生 33 名、二つの共学大学の学生 100 名（女子 47 名、男子 43 名）、一般男性 5 名の計 128 名であった。このうち、今回は女子のデータのみを利用した。

調査内容

1. 外見パターン：女子大学生に比較的好く見かける 5 種の外見パターンを、調査に用いた。

パターン 1：茶髪に手ぐし程度の髪形、下はジャージに上はスウェットの女性（略ジャージ）

パターン 2：茶髪に一つ結びの髪形、下はスキニーパンツに上はポロシャツの女性（略ポロシャツ）

パターン 3：黒髪に一つ結びの髪型、スーツ姿の女性（略スーツ）

パターン 4：茶髪で巻き髪、下はひざ丈のスカートに上は花柄のブラウス（略スカート）

パターン 5：黒髪に、下はジーパンに上は T シャツを着ている女性（略 T シャツ）

2. 上に示した外見がどのような場面に適合するかを調べるために、大学生に身近な 5 種の場面を設定した

場面 1：宿泊研修で山に登る

場面 2：アルバイトやボランティアに向かう

場面 3：就職活動中でこれから起業説明会に向かう

場面 4：これからサークルの打ち上げで、飲み会がある

場面 5：好きなバンドのライブを観に行く

3. 外見パターン 5 種にどのような印象を抱くのかを見るために、形容詞 12 対で構成され、5 件法で回答させる SD 法で評価させた。²⁾ 各外見パターンが、それぞれの場面にどの程度適合しているかを、5. 相応しいから 1. 相応しくないまでの 5 件法で回答させた。

結 果 と 考 察

SD 法による回答項目を、評価、力量、活動に 4 項目ずつ分

類し、それぞれの項目の平均値を出し、これをそれぞれの特徴の得点とした。その得点に基づいて別学・共学間の比較を、t 検定を用いて行った。

1. パターンの印象における大学種間差

パターン 1 では、評価因子において共学の方が別学よりも優位に得点が高かった（別=3.49、共=3.72：t=2.093, df=78, p<0.05）。パターン 2 では、評価因子（別=2.21：共=2.54 t=2.742, df=78, p<0.01）と力量因子（別=2.58：共=2.89 t=3.360, df=78, p<0.01）において、共学の方が評価が高かった。またパターン 5 では、力量因子で共の方が評価が高かった（別=2.73：共=3.00 t=2.793, df=78, p<0.01）。他のパターン・因子には有意な差が見られなかった。これを見ると、スーツやスカートといった伝統的な外見では差が見られず、ジャージやポロシャツ、T シャツといったカジュアルな装いで差が表れることが分かった。

次に、場面ごとの外見の相応しさを見たところ、大学種間でいくつかの外見、いくつかの場面での評価に違いが見られた。ジャージでは全体的に低い評価であったが、それでも別学では、全員が面接では無理と答えたのに対して、共学では 2 割近くが 1 とは答えなかった。ジャージは全体的に、その場面においても相応し度が低かった。ポロシャツでは、アルバイト・ボランティアでは評価が高かったが、別学は共学に対して一段と相応しいと回答する傾向にあった。またスーツは、面接でどちらの大学種でも圧倒的にふさわしいと回答されたが、別学では全員そうであったのに対して、共学では複数人で別の解答が見られ、共学では全員一致しなくてもよいという考えが育まれるのかもしれない。

スカートにブラウスは、相応し度が高い場面では別学が高評価し、相応し度が引く場面では別学が低い評価をしていた。これは、別学ではある評価が高まると、多くの人が同じ反応に偏る傾向があるのではないかと推察される。共学では、異性が大学生活の中にいることによって、様々な考えがあってもよいということを身に着けるのかもしれない。シャツでは、場面ごとにふさわしいとする傾向に違いが見られた。宿泊研修では共学が相応しいとしたが、サークルの飲み会では別学の方が相応しいとしていた。多くの場合、サークルの飲み会では、別学は同性だけ、共学は異性も同席することを考えると、このような席に T シャツ以外の装いもふさわしいとする傾向が強く働くことも予想される。

引用文献

- 1) 坂井信之(2009) 生活科学論叢, 40 巻, 1-13.
- 2) 心理学実験指導研究会編 (1985)「実験とテスト—心理学の基礎 (実習編)」培風館.

本研究は、岐阜女子大学大学院文化創造学研究科田口留美によって、2017 年度に提出された学士論文を加筆修正したものである。